

太宰治「駈込み訴へ」講義実践：語り、読者、「ゆれる」

茶園，梨加
北九州市文化財保護審議会：委員

<https://doi.org/10.15017/1787561>

出版情報：九大日文．26，pp.10-23，2015-10-01．九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

太宰治「駈込み訴へ」講義実践

——語り、読者、「ゆれる」——

茶園梨加

はじめに

本稿は、論者が西南学院大学（日本文学2）、二〇一〇～二〇一三年度通年）、及び、福岡教育大学（日本の近代文学）、二〇一一年度後期）において行った講義の実践報告である。

この講義では、大正期以降の短編を読み、作品に関する知識と読解能力の習得を目的とした。一篇の作品を、多角的に読解することが、本講義の意図するところである。そのため、小説の表現を味わいつつ、時代背景、文学理論、作家の来歴などの諸資料を提示しながら、講義を展開した。様々な諸資料を手元に置いて読むことで、読みの可能性が広がる体験をすることが目的である。

講義で取り扱ったテキストは、『現代日本の文学』（双文社出版、一九七一年四月）^①である。このなかから、本稿では、太宰治「駈込み訴へ」の三回分^②の講義実践を報告したい。順番に、以下の五点を学習目標としている。数字は本稿の節と呼応する。

- 一 典拠と作品の比較をする。
- 二 小説の語りを分析し、面白さを味わう。
- 三 読み方によって、解釈が変わる体験をする。
- 四 他作家の作品と比較をして、表現の独自性を知る。
- 五 現代作品とのつながりを探り、さらに文学を楽しむ。

講義のなかで参考にした先行研究は、本文中および末尾の参考文献一覧に記載した。講義では毎回受講者にコメントを書いてもらい、次週にプリントにして公表し、応答するという方法をとった。そのため、受講生からのコメントは次週以降の授業展開に、なくてはならないものであった。また、今回は板書内容について明示はしないが、本文の構成と同じである。

一 太宰版ユダの誕生

——典拠と作品の比較をする

まず第一週は、典拠との相違、ユダの気持ちの揺れを検討することが目的であった。いくつかの問いを投げかけながら、講義をすすめていった。

「駈込み訴へ」は、一九四〇（昭和十五年）年二月「中央公論」に発表された後、同年六月『女の決闘』（河出書房）に収録された。新約聖書を典拠としており、イエスを売るユダが告白をする、というかたちの一人称独白体である。作品の表現を用いると、「私」（ユダ）が「あの人」（イエス）のことを「旦那さま」（祭

司長に語る、という内容である。

では、作品化に伴い、何が書き足されたのか。典拠と作品との相違については、笠井秋生「駈込み訴へ」試論」に詳しい⁽³⁾。笠井論を元に作品を七つの部分に分け、新約聖書の該当箇所をそれぞれ示した。たとえば、新約聖書では、

《新約聖書》(ヨハネによる福音書 十二章より)⁽⁴⁾

過越祭の六日前に、イエスはベタニアに行かれた。そこには、イエスが死者の中からよみがえらせたラザロがいた。イエスのためにそこで夕食が用意され、マルタは給仕をしていた。ラザロは、イエスと共に食事の席に着いた人々の中に入った。そのとき、マリヤが純粋で非常に高価なナルドの香油を一リトラ持つて来て、イエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐった。家は香油の香りでいっぱいになった。弟子の一人で、後にイエスを裏切るイスカリオテのユダが言った。「なぜ、この香油を三百デナリオンで売って、貧しい人々に施さなかったのか。」彼がこう言ったのは、貧しい人々のことを心にかけていたからではない。彼は盗人であつて、金入れを預かつていながら、その中身をこまかしていたからである。イエスは言われた。「この人のするままにさせておきなさい。わたしの葬りの日のために、それを取って置いたのだから。貧しい人々はいつもあなたがあたがたと一緒にいるが、わたしはいつも一緒にいるわけではない。」

と綴られるいわゆる「香油事件」が、「駈込み訴へ」では次のように描かれている。

《本文》

お聞き下さい。六日まへのことでした。あの人はベタニアのシモンの家で食事をなさつてゐたとき、あの村のマルタ奴のマリヤが、ナルドの香油を一ぱい満たして在る石膏の壺をかかへて饗宴の室にこつそり這入つて来て、だしぬけに、その油をあの人頭にざぶと注いで御足まで濡らしてしまつて、それでも、その失礼を詫びるどころか、落ちついてしやがみ、マリヤ自身の髪の毛で、あの人濡れた両足をていねいに拭つてあげて、香油の匂ひが室に立ちこもり、まことに異様な風景でありましたので、私は、なかなか無性に腹が立つて来て、失礼なことをするな！と、その妹娘に怒鳴つてやりました。(略)すると、あの方は、私のはうを屹つと見て、「この女を叱つてはいけない。(略)この女が私のからだに香油を注いだのは、私の葬ひの備へをしてくれたのだ。(略)」さう言い結んだ時に、あの方の青白い頬は上気して赤くなつてゐました。私は、あの方の言葉信じません。(略)あの方は、こんな貧しい百姓女に恋、では無いが、まさか、そんな事は絶対に無いのですが、でも、危い、それに似たあやしい感情を抱いたのではないか？

「駆込み訴へ」は、ユダの視点から出来事が語られている。

典拠との大きな違いは、「私」(ユダ)の内面が創作されている点である。そのうえで、ユダから見たイエスが、マリヤに恋愛感情とも思える反応をみせていることが語られている。引用に続く部分では、実は自分もマリヤへ好意を抱いていたことを、

「あの人は、私の女をとつたのだ。いや、ちがった!」あの女が、私からあの人を奪つたのだ。ああ、それもちがふ。」と言ひ換えている。ユダのマリヤへの愛情か、またはユダのイエスへの愛情か、複雑な三角関係が語られるのである。このように、典拠で描かれた出来事に、ユダの眼からみた人物描写が盛り込まれる。さらに、感情が極端に揺れながら語られており、読者を混乱させる構造ともなっている。

この「私」(ユダ)の感情の揺れを切り口とし、検証したい。四つのポイント、「憎悪」「愛情」「愛憎の対象としての「あの人」」「ユダの感情の高ぶり(起伏の激しき)」に即してみていく。前三点を、引き続き笠井論を参照する。

一点目は「憎悪」である。作品冒頭で、「私」は、「あの方は、酷い。酷い。はい。厭な奴です。悪い人です。ああ。我慢ならない。生かして置けねえ。」と語る。そもそもなぜ「私」は「あの人」を我慢ならないほど憎んでいるのだろうか。この後の部分で「私を意地悪く軽蔑するのだ。」と言い、さらには、「煩をいとはず、してあげてゐたのに、あの方はもとより弟子の馬鹿どもまで、私に一言のお礼も言はない」と続ける。また、「た

まには私にも、優しい言葉の一つ位は掛けてくれてもよささうなのに、あの方は、いつでも私に意地悪くしむけるのです。」と「私」は、語っている。つまり、「どんなにこつそり庇つてあげ」ても、「宿舍の世話から日常衣食の購求まで、煩をいとはず、してあげて」も、「一言のお礼も言はない」だけでなく、「意地悪く軽蔑する」から、ユダはイエスに憎しみを抱いた、ということになる。

二点目は「愛情」である。「あの人」を憎悪する「私」は、しかし、一方で「あの人」を愛しているとも語っている。さらに後の部分では、「私はあなたを愛してゐます。ほかの弟子たちが、どんなに深くあなたを愛してゐたつて、それと較べものにならないほどに愛してゐます」と語る。これほどまでに「私」が「あの人」を深く愛する理由とは、何だろうか。ユダは、語る。「私はあの人を、美しい人だと思つてゐる。」「けれども私はあの人を美しさだけは信じてゐる。あんな美しい人はこの世に無い。私はあの人を美しさを、純粹に愛してゐる。それだけだ。」つまり、ユダはイエスが「美しい人」だから愛する。「子供のやうに慾が無」く、「精神家」であり、「いつでも」、「優し」く「正し」く「貧しい者の味方」であるからと言うのである。けれども、イエスはユダの「無報酬の愛情」を受けとらない。それはなぜか。イエスの愛は万人に向けられるからである。「私」(ユダ)の「私とたつた二人きりで一生永く生きてゐてもらひたい」という願いは満たされることはない。よつて、「お礼も言はない」「意地悪く軽蔑する」と「私」には思える

のである。

ユダのイエスへの愛情は、報われることはない。愛するが故に、独占したいという想い。ユダの片想いの愛情は、その想いが深い故に、正反対の憎しみへとつながらず。極端に揺れ動く感情は、子どものものであり、極端でわがままなものにうつる⁵⁾。愛憎入り交じる感情が、ユダの語りのなかで、感情が揺れ、錯乱しているかのように表現されている。しかも、それが口頭で、たつた今、読者の目の前で語っているような臨場感をもつて、表現されている。

二 復讐の鬼となる過程

——小説の語りを分析し、面白さを味わう

第二週は、三丁目、四丁目のポイントを検討しながら作品の後半部分を読解した。第一週の授業コメントには、「イエスがユダの愛情を受けとれないのは理解できたけれど、イエスがユダに対して意地悪く軽蔑するのは何故か」、「イエスは「いつでも」優しく正しいはずなのに、なぜユダに一言のお礼も言わず、意地悪く軽蔑するのか」という疑問が挙げられた。そのため、まずイエスに焦点を当てて考察を行った⁶⁾。

三丁目のポイントは「愛憎の対象としての「あの人」」である。一点目と二丁目のポイントでは、ユダの愛憎の理由を探したが、ここで、「あの人」(イエス)の立場から考えてみたい。なぜ、イエスは自分を献身的に愛してくれるユダを「意地悪く

軽蔑する」のだろうか。ユダは、続ける。「さうして、出来ればあの人に説教などを止してもらひ、私とたつた二人きりで一生永く生きてゐてもらひたいのだ。あああ、さうなつたら！私はどんなに仕合わせだらう。私は今の、此の、現世の喜びだけを信じる」。この、現世の喜びだけを求めるユダの考えは、イエスの教えとは相反するものであるはずである。また、ユダは、イエスが「天の父の御教へ」を説いたり、「説教」などしたりすることに反対している、とも語っている。だからこそ、イエスはそうした考えを抱くユダに対し、共鳴できるはずはない。「私」の眼には、自分を「賤しめ、憎悪し」、「意地悪く軽蔑」しているとうつるはずである。イエスの教えとは異なるものを、ユダは求めているからである。

しかし、ここで重要となるのは、そもそもユダの言うことは本当なのかという点である。本当にイエスは、ユダを意地悪く軽蔑したのか。ユダの思い込みなのではないのか。すべてが「私」(ユダ)の語りで成り立つ本文を、私たち読者はその真偽を問いつつながら、読みすすめていく。

さて、この語りの真偽と深く関わる問題として、最後の四丁目のポイント「ユダの感情の高ぶり(起伏の激しき)」がある。「私」は、言い直し、ないしは言い間違いを度々行っている。「お母の MARIA 様と、私と、それだけで静かな一生を、永く暮らして行くことあります。私の村には(略)年老いた父も母も居ります。」と言ったかと思えば、「私とたつた二人きりで一生永く生きてゐてもらひたいのだ。」と異なることを後に語っている。

また、「ああ、もう、わからなくなりました。私は何を言っているのだ。さうだ、私は口惜しいのです。」「いや、ちがつた！（略）それもちがふ。私の言ふことは、みんな出鱈目だ。一言も信じないで下さい。」「はい、旦那さま。私は嘘ばかり申し上げました。」などのように自分自身の語りについて、本人すらも疑うような言葉がある。

ほかの人の手で、下役たちに引き渡すよりは、私が、それを為さう。けふまで私の、あの人に捧げた一すぢなる愛情の、これが最後の挨拶だ。私の義務です。私があの人を売つてやる。つらい立場だ。誰がこの私のひたむきの愛の行為を、正常に理解してくれることか。いや、誰に理解されなくてもいいのだ。私の愛は純粹の愛だ。人に理解してもらふ為の愛では無い。そんなさもしい愛では無いのだ。

愛情と殺意と、一見矛盾するかのような感情を、ユダは、道理にかなったことのように正当化し、語る。

このような「私」の語り⁹⁾を、私たち読者は、果たして信頼できるだろうか。例えば、横光利一「蠅」（本講義第三回）は、外的焦点化しており、「カメラ・アイ」とも呼ばれる特徴がある。また、川端康成「葬式の名人」（本講義第八回）での「私」の語りは、内的焦点化している、一人称の語り手であった¹⁰⁾。「駆込み訴へ」の場合も、一人称の語り手であり、内的焦点化している。さらに、その特徴は、「信頼できない語り手」¹¹⁾であると

言える。

講義コメントでは、「純粹の愛」とユダは語るが、純粹どころかむしろ歪んでいる、という意見もあった。私たち読者は、ユダの語った内容を、そのまま信じることはできない。所々に綻びを持つユダの語りは、信頼できない語りである¹²⁾。

「駆込み訴へ」を読む、私たち読者は、新約聖書を読む場合と異なり、出来事をユダの語りを通して理解する。しかし、別の観点から考えると、本来ならば、イエスにはイエスの、他の弟子達には弟子達の語り（言いつ）があるはずである。よってユダのみの語りは限定された世界のみ描いているのである。

三 あなたなら、どちらで読むか？

——読み方によって、解釈が変わる体験をする

さて、作品の語りの特徴をより理解するために、ここで一つの提案をしたい。作品の「読み方」の提案である。あなたならば、いったいどちらの立場で読むだろうか。

① 語り手であるユダ∥読者

② 聞き手である「旦那さま」∥読者

まず①の読み方について。これは、声に出してユダの語りを読んでみて、作品を味わう、という提案である。黙読の際よりもさらに、「私」の感情の起伏の激しさを感じることができる

かと思う¹⁾。ユダの気持ちの揺れ、混乱している様子は、自分の気持ちが定まらず、イエスを売ることに迷いがあるためである。だからこそ饒舌になり、自分を弁解しようと必死になっている。

私はいまは完全に、復讐の鬼になりました。

だが、彼は、最後は、「完全に復讐の鬼」となつてしまふ。物語ることとは、自分自身の感情を、言葉にする行為である。語ることで、ユダは自分自身を作つていった。語りのなかで「さうだ」とも言っていることから、自分を納得させるように語っている。

私の名は、ユダ。へつへ。イスカリオテのユダ。

語り手「私」は、すべてを語つた後に、完全に裏切り者のユダとなつたのである。言葉が自分を作つたのだ。

この読み方は、ユダのように、読者であるあなたは、「優しくて正しい」イエスを売ることができるのか、という問いを投げかける。やはり、迷いが生じるのではないだろうか。

一方、②聞き手である「旦那さま」＝読者としての読み方は、どうか。すでに触れたように、作品は、まさに私たち読者の目の前で「私」(ユダ)が語っているかのように展開する。つまり、この場合、ユダの話を知っているのは、ユダが語りかける「旦那

さま」である。読者は「旦那さま」の立場に置かれている。作品のなかで、「旦那さま」(＝読者)は、ユダの話を知りだけである。この「旦那さま」は、典拠となつている新約聖書を介すとイエスとは対立する考えをもつ人物であることが分かる。イエスを煙たがり、「死刑」にしたいと望んでいる役人である。さて、今、「旦那さま」である私たち読者は、「優しくて正しい」あの人を処することができるかどうか――。

そのように考えたときに、本当の悪人とは、イエスを売ろうとしているユダではなく、「旦那さま」である読者とも思えてくる。二つ目の読み方は、そのような一種危険な読み方である。ユダの語りを信じ、イエスを処することが本当にできるか、どうか。「旦那さま」に迷いはなかつたのだろうか――。きつとユダのように、ただ聞いているだけの「旦那さま」にも迷いが生じるだろう。つまり、この二つ目の読み方は、新たな感情の揺れの誕生を引き起こすものである。ユダへの応答として「旦那さま」＝読者であるあなたは何を語るのか、また語れるのかという疑問も、読者につきつけているのである²⁾。

四 ユダ像の受容

——他作家の作品と比較をして、表現の独自性を知る

これまで受講生からのコメントの中には、作品の内容を扱った回であっても、作者である太宰治に関するものがたびたび挙げられてきた。作者の意図については、本講義第三回目(横光

利一「蠅」のなかで、ロラン・バルト「作者の死」を紹介していた。しかし、それでも、作品を創作した人物に関する関心が無くなることはない。作者来歴もまた、作品を多角的に読解する際の一つの資料である。そのような立場を本講義ではとっているため、第三週では、作品の創作背景について確認した。さらには影響をうけた作品や、影響を与えた現代作品を読み、作品を広く開いて味わうことを目的とした。

まず、作家は、どのようなきっかけで聖書と出逢ったのだろうか。年譜や先行研究⁽¹³⁾を参考にすると、一九三〇（昭和五）年四月に、塚本虎二の主催する、無教会派の丸の内会場ビルでの日曜集会に参加している。このころすでにキリスト教信仰を受け入れていた、といわれている。また、一九三六年十月から十一月に入院中、聖書を集中的に読んでいた。さらに、一九四〇年頃、無教會的聖書研究誌「聖書知識」の購読を開始する。入院中のことを記した作品に「HUMAN LOST」〔新潮〕一九三七年四月発表）があるが、「二十六日。」の箇所には、「マタイ伝二十八章。読み終へるのに、三年かかった、マルコ、ルカ、ヨハネ、ああ、ヨハネ伝の翼を得るは、いつの日か。」とある。主人公の体験と、作家自身の体験を同一視することはできない。だが、一つの参考資料として読むならば、少なくとも作家にとつて聖書が重要な文献として存在していたことは疑いえない。時間をかけて丹念に読み、自分のものにしてようとして読んでいたのではないか。そのことが、後に「駆込み訴へ」のように、聖書を題材としながら、自分なりの解釈を加え、現代の小説として蘇

らせたことに結実するのである。

さて、太宰が聖書を読むきっかけを、もう少し違う視点から考えてみたい。それは、他の作家からの影響である。そもそも聖書や、キリスト教自体への関心はどこから生じていたのか。おそらく、芥川龍之介からの影響は少なくないだろう。芥川には、新約聖書を素材とした作品がある。一九二七年八月「改造」に発表された「西方の人」⁽¹⁴⁾を紹介したい。

ユダは誰よりも彼自身を憎んだ。十字架に懸つたキリストも勿論彼を責めたであらう。しかし彼を利用した祭司の長たちの冷笑もやはり彼を憤らせたであらう。／「お前のしたいことをはたすが善い。」／かう云ふユダに対するクリストの言葉は軽蔑と憐憫とに溢れてゐる。「人の子」、クリストは彼自身の中にも或はユダを感じてゐたかも知れない。しかしユダは不幸にもクリストのアイロニイを理解しなかつた。(29 ユダ)

「西方の人」は、三人称の語りによつて、聖書の人物名ごとに章立てられた構成となつている。イエスが自分自身の中にもユダを感じていたかもしれない、という読み方は、ユダではなく、「人の子」としてのイエスの心中を探つてはじめて見えるものである。

またその他にも、一九三七年十二月から翌六月に「コギト」に発表された山岸外史「人間キリスト記」或ひは「神に欺かれ

た男」⁽¹⁵⁾がある。山岸は、「自分にはイエスが、五体もあれば、体臭もあれば、野心も錯覚もあった人間としか考えられない。」

（「序」）という立場から執筆している。これまで、太宰は「人間キリスト記」のイエスを描く方法を、ユダに適用したのではないかと論じられてきた。つまり、「人間ユダ」の物語として、私たち読者により身近なものとして描いたのである。⁽¹⁶⁾ユダに関する記述では、「けれども、一度も、イエスから誉めてもらえたことがなかった。ユダには、これがきわめて不満であった。努力すればするほどイエスからその才能を黙殺された。」（ユダの章）のように、「駆込み訴へ」との類似をみることができる。その他、「人間キリスト記」では、本稿一節で引用した香油事件について、「むしろ、イエスが、このマリアを、心から好んでいた模様が理解されてくるように考えられる。自分は、それを、イエスも恋をしたといっているように思う。」（マルタの妹マリア）と、やはりイエスの「恋愛」について言及している。

では、太宰以降の作家ではどうだろうか。遠藤周作「イエスの生涯」（新潮社、一九七三年十月）を参照してみたい。

イスカリオテのユダ。彼の心理はヨハネ福音書が書いているようなあんな単純なものではないだろう。（略）最後までつき従って一握りの弟子たちと同じように彼も自分がイエスを見棄てれば、なぜか生涯、言いようのない辛さ、寂しさを噛みしめねばならぬことを感じていたのだ。彼はそうした自分の心理と幾度も闘ったであろう。（略）彼は自分を

愛するようにイエスを愛し、自分を憎むようにイエスを憎んだ。愛と憎しみとのまじった二つの気持からユダはエルサレム到着後のイエスをそのそばで窺っていたのである。

やはり、遠藤の場合も三人称の語りによって、ユダの心理を分析している。「悪人」の代名詞であるユダの心中を想像し、愛と憎しみがまじった感情や、幾度も自分の心理を闘ったであろうことを読み取っているところは、「駆込み訴へ」との共通点と言える⁽¹⁷⁾。ただし、「西方の人」や、「人間キリスト記」、「イエスの生涯」と比べて分かるように、地の文での解説は「駆込み訴へ」にはない。以上のように、聖書を典拠とした他作品と比較することで、「駆込み訴へ」の語りのユニークさを改めて味わうことができる。

五 さらに文学作品を楽しむために

——現代作品とのつながりを探る

太宰治「駆込み訴へ」からの影響は、一見、意外とも思える場所に存在している。例えば、二〇〇六年に公開された、西川美和監督作品、映画「ゆれる」がある。製作の過程で、西川は出演者であるオダギリジョーと香川照之に、参考として「駆込み訴へ」を読むことを勧めた⁽¹⁸⁾。その後、監督自らが小説化し、第二〇回三島由紀夫賞候補作となる。小説では、全ての章が、

登場人物各々の語りによつて成立している。

- 第一章 早川猛のかたり
- 第二章 川端智恵子のかたり
- 第三章 早川勇のかたり
- 第四章 早川修のかたり
- 第五章 早川猛のかたり
- 第六章 早川稔のかたり
- 第七章 早川猛のかたり
- 第八章 岡島洋平のかたり

登場人物の語りによつて、事件が語られる形式は、かつて芥川龍之介「藪の中」において採用されたものであった。その他、現代の作品では、村上龍『KYOKO』（集英社、一九九五年十一月）などがある。特別に珍しい形式というわけではないが、事件の真相が不明であるという点では、「藪の中」との類似をみることができる。また、語りによる特徴がある「駆込み訴へ」とのつながりもみることができよう。

「ゆれる」は、都会で暮らす弟・猛たけが、母親の一周忌のために故郷に帰ってきたことから、物語がはじまる。弟は、故郷に住む兄・稔と対照的な性格であった。やはり同じ田舎町に暮らす智恵子が、死亡する事件から物語は大きく動く。溪谷のつり橋の上で智恵子と稔がみ合うところを、弟は見ていた。稔は智恵子に好意を持っていたが、この事件の前日に猛は智恵子と

肉体的関係を結んでいた。智恵子は兄に殺されたのか。それとも転落事故だったのか。当初、兄は殺していないと信じていた弟は、裁判の証言台で兄が殺したと語る。物語は、七年後、刑に服した兄が出所し、弟がその後ろ姿を追っかけて、大声で何度も呼びかける場面で幕を下ろす。「兄ちゃん、うちに帰ろうよ」という弟の呼びかけに対し、兄は、やつと振り向き、一瞬、「弟に微笑みかけたように見えた」。映画でも、兄役の香川照之は、観客によつて解釈の分かれるような表情を浮かべている。結末での、兄の心中は描かれることはない。

この小説は、ポプラ文庫版と文春文庫版で異なる「解説」を収録している。二〇〇八年八月に刊行されたポプラ文庫版では、本編の後に、香川照之による「解説 早川稔のあとがき」が付けられている。つまり、映画で登場人物の早川稔を演じた俳優が解説を行っているのである。さらにその内容は、演じた早川稔としての文章となっている。本編の後に、兄（としての香川）が物語後の心境を綴っているのだ。これは小説から映画、ではなく、映画が先にあつて後に小説が書かれたからこそできる、一つの「遊び」であろう。別の見方をすれば、映画では不可解なまま幕を閉じた結末から解釈は観客に任されているが、ポプラ文庫版では一つの「答え」を読者に与えてしまっているともいえる⁹⁾。映画のミステリアスな結末に満足した読者にとつては、このポプラ文庫版は意外なものであるだろう。だが、このことを積極的に捉えるならば、香川が映画が終わつても尚、兄になりきつて、応答したいと思つてしまうほど、物語の面白さ

があつた、とも言える。

その後、二〇一二年八月に刊行された文春文庫版では、香川の解説ではなく、梯久美子による文章が付されるようになる。

梯は、先の演技指導について言及はしていないが、「駆込み訴へ」を引き合いに出す。

本人も気づいていなかった感情が、魚の腹に包丁を入れて内蔵を取り出したときのように、ずるずると絡まり合つて引つ張り出される。その不気味な痛快さ。読みながら、嗜虐なのか被虐なのかわからない快感でぞくぞくしてくる。

兄弟だけではなく、六人全員の独白が、矛盾し、裏返り、変転する。いったん口にした悪意が、自分自身を変えていくのである。

「いったん口にした悪意が、自分自身を変えていく」のは、まさに「駆込み訴へ」のユダ「私」であつた。「あの人」への愛憎入り交じる感情を抱えながら、それでも、憎しみと、愛情と、揺れ動きながら、語るその瞬間に自らが、その発せられた言葉によつて感情を確認するかのようには、「悪人」ユダとなつた。

では、兄と弟は、どちらが「私」で、どちらが「あの人」か。弟をユダ、兄をイエスとしてみる論もあるが⁽⁹⁾、各々がユダとして語り、相手をイエス「あの人」としてイメージしているのではないか。兄が弟を語る時は、弟をイエスに、弟が兄を語る時は、兄がイエスとして想定されている。もちろん、弟が兄の

殺意を立証する（「売る」という展開は、弟「ユダ」と兄「イエス」としてみる方が自然だろう。だが、兄の語りにも、次のように、「駆込み訴へ」のユダ的要素が強い。以下に二人の語りを抜粋してみよう。

《弟——「第五章 早川猛のかたり」》

そうなんです。兄は、僕たちのことに気付いていたんです。弟の僕が、智恵子とセックスをしたことをわかつていて、それを黙っていたんです。兄はずつと嫉妬をしていたんです。（略）智恵子はプロポーズどころか、一度も口説かれたこともなく、それでも逃げる場所もなく、歳だけどんどんとつていくことを恐れていたのに違いありません。でもそれだつて、兄の作つた仕掛けなんです。じくじくと熟れきつて、誰も手を触れたがらない腐臭を漂わせるようになるのをきつと待つていたんです。ずるいんです。闘わず、傷つかず、勝利を勝ち取るうともしないくせに、零れ落ちた売れ残りの汁を吸つて、生きながらえようとするんです。それでいて、周囲の誰からも憎まれず、非難されずにのうと暮らしてられる兄の人生が、僕には怠惰に見えました。智恵子は息苦しさに悲鳴を上げそうになつていました。でなければ、どうして昔自分を放り棄てた僕なんかに抱かれますか。それもこれも全部兄の仕掛けた罠だったんだ。僕を試したんだ。（略）兄は事件を起こして、全てをぶち壊して、僕を惑わそうとしているんだ。これは兄の復讐

です。兄は僕のことを憎くてたまらないのです……。／＼けれどほんとう？　ほんとうに？　ほんとうなの兄ちゃん。／＼悪いのは僕でかまわない。智恵子を殺していたって、もうかまわない。あんた、僕のことを一体どう思っていたの？

《兄——第六章　早川稔のかたり》

事実を話そう。僕の弟が、僕の無実を信じていないということ、これが事実だ。／＼その橋の上で、弟にぎゅう、と抱きしめられた時にわかつたんだ。／＼ああ、この子は、人殺しの弟になりたくないんだ、と。／＼たつたそれだけのことだよ。／＼信じられない！　と猛は叫んだ。どうして僕が兄貴のことを疑うんだよ、とね。／＼お前、たろうよ、と笑つたよ。僕のことをずっと今まで疑つてきたんじゃないか。初めから一度でも、信じたことなんて、なかつたじゃないか。でも信じるとは言わないよ。それが猛という僕の弟だもの。僕の誇りで、僕の宝。ずっとお前が眩しくて仕方がなかつたよ。(略)／＼僕は吊り橋の上で／＼智恵子さんに兄が詰め寄るのを見たのです／＼ぐらぐら揺れる橋の上で二人はもみ合つて／＼彼女は兄に突き落とされました／＼悲鳴を上げて／＼落ちていきました／＼僕は、見ていました／＼一篇の詩を聞いているようだった。(略)／＼ゆるやかな西日がすうつとその横顔に差し込んでいた。弟の顔は、なぜだかとてもすつきりしていて、男でもないような、女でもないような、不思議な神々しさだった。／＼そうだ。お母さんが死んで、納屋

を片付けていた時に出てきた古い古い掛け軸の絵を思い出したよ。僕を売つた男の顔は、あの観音様みたいにきれいだつたんだ。

小説「ゆるれる」が興味深いのは、単に「駆込み訴へ」との類似点にあるのではない。ユダの語りに影響を受けながら、二者がユダになるといふ、二重の構造にある。つまり、どちらもユダであり、どちらも相手をイエスのように捉えているのだ。相手にとつてはイエスだが、自らはユダのように語る構造となっている。この、二重のユダの語り「ゆるれる」の魅力である。

本稿第一節(本講義の第一週目)で取りあげた、本文の引用箇所を思い出してほしい。香油事件の記述である。一人の女性を巡る事件(三角関係)を契機にしているという点においても「駆込み訴へ」との接点を見ることができよう。

おわりに

一方では最も卑俗で血なまぐさい他殺や自殺に、他方では戦鬪的唯物論を含めて最も微妙な全哲学の根本問題に、直接連なるこのような謎について、よし『学問のための学問』のそしりを受けようとも、しばらくのあいだ『真剣にかつ自由に』(アカルト『省察録』)考えてみるということも、大学に学ぶことを許されたわれわれの、光栄ある任務の一つであろう。

滝沢克己は、一九五五年に、要求されていた『実際に役立つ学問』が、「ある意味では戦争中から引きつづいて」いた要求だと述べる。だが、現実の社会に役立つ学問を必要としながらも、一方で、そのまま現実の理想像というものを何の疑いもなく受け容れる危険性を問う。批判の対象として現実をみる際の学問として、滝沢は哲学の必要性を綴った。

いまから六〇年前の言葉が、いまの日本文学研究・教育の場においても響いているように思う。私たちは、何のために文学を学び、教えるのだろうか。実生活に役立つ／役立たないといった単純な図式では把握することできない、必要性があるからである。作家が人生をかけて執筆した作品に、真剣に向き合うことは、実に刺激的な行為である。同時に、自分が何かの発信源となり、他者に、自らの思いを言葉で表現したいという感情の発露は、文学作品を読むことを通して、促されるのではないだろうか。

本稿で「駆込み訴へ」をもとにみてきたように、一篇の作品は、典拠、同時代作品、類似テーマの他作品、現代作品へと、場所や時代を超えていく²⁾。文学作品を読解する行為は、個の作業である。だが、講義のなかで取り上げることで、集団の作業となる。集団の中で、多角的視点を通して、作品の世界は広がっていくのである。ここに、文学を、「真剣にかつ自由に」学ぶことの楽しみがある。

【注記】

1 なお、本文中の引用は使用したテキスト『現代日本の文学』（双文社出版、一九七一年四月）に拠る。

2 通年の西南学院大学は全三十回のうちの第十六く十八回目、半期の福岡教育大学は全十五回の第十く十二回目にあたる。本講義の受講生たちに、感謝申し上げます。

3 『太宰治研究6』（和泉書院、一九九九年六月）所収。この論文は、「コミュニケーションの運動に携わる太宰の姿がイエスに、コミュニケーション思想に深く共感しながらもその運動から離脱して行く太宰の姿がユダに託されている」という立場をとっている。だが、本講義では、作品内容と作家の政治運動とのつながりに重きを置いていない。今回は、笠井論のなかで、典拠との相違、ユダの感情に関する考察について参考にした。

4 『聖書 新共同訳——旧約聖書続編つき』（日本聖書協会、一九九四年）

5 この第一週の受講者からのコメントのなかで、以下のように、ユダへの否定的感想も並んだ。「誰かに取られるくらいなら殺してやるなどといった感情は、純粹どころかむしろ歪んでいる」「ユダはいわゆる「ツンデレ」という印象」「片想いをしている人の話のよう」「独占欲の強さが出ている」「今でいう所謂「ヤンデレ」というものでは」「イエスに愛情の見返りを求めて憎むところは子供っぽい」など。

6 コメントは他に、「キリスト教の聖書の話が全然分からないから、新約聖書を典拠としているこの小説も意味が分からなかった」というものもあった。そのため、第二週では、『新約聖書 まんがで読破』（アースト・プレス、二〇一〇年十二月）、船本弘毅監修『二冊でわかる 名画と聖書』（成美堂出

版、二〇一一年一月。このうち、レオナルド・ダ・ヴィンチ『最後の晚餐』、ジヨット・ディ・ボンドーネ『ユダの接吻』を参照)といった資料を提示し、補足説明を行った。

- 7 「駆込み訴へ」の「語り」に関する論文は、森厚子「太宰治『駆込み訴へ』について——語りの構造に関する試論——」(『解釈』一九七九年二月)、嘉数弓子「『駆込み訴へ』論」(『上智教育大学国語研究』5、一九九二年二月)、高塚雅「太宰治『駆込み訴へ』試論——旦那さまの不在——」(『中京大学文学部紀要』二〇一〇年七月)、北條綾音「『駆込み訴へ』の方法と戦略」——語り・主題のアンビバレンス——」(『國文』二〇一二年七月)などがある。

- 8 ジェラルド・ジュネット『物語のディスクール——方法論の試み』(花輪光・和泉涼一訳、水声社、一九八五年九月)。講義では、土田知則・青柳悦子・伊藤直哉『ワードマップ 現代文学理論 テクスト・読み・世界』(『新曜社』一九九六年十一月)、川口喬一・岡本靖正『最新 文学批評用語事典』(研究社、一九九八年八月)を紹介しながら説明を加えた。
- 9 ウェイン・C・ブース『フィクションの修辭学』(米本弘一・服部典之・渡辺克昭訳、水声社、一九九一年二月)

- 10 講義では、他にも、たとえば夏目漱石「坊ちゃん」の語り手などを例に挙げながら信頼できない語り手について説明を加えた。

- 11 よく触れられることではあるが、津島美知子は『回想の太宰治』(人文書院、一九七五年五月)において「太宰は炬燵に当たって、盃をふくみながら全文、蚤が糸を吐くように口述し、淀みなく、言い直もししなかつた」と、口述筆記によって作品が執筆されたことを証言している。

- 12 この二通りの読み方については、代表的なものとして以下のような受講生

の反応があった。①については、「旦那さま」の立場は権力がある地位にいる人物ですが、ユダは誰でも起こりうる(状況・心情)立場にいるから彼の葛藤について考えやすいと思います。「ユダの心の揺れと同じように決断を迫られた読者の心の揺れも、それぞれ違ったものがあつて面白いのではないか。実際にもし、ユダの立場であつたなら、イエスを裏切ることができたろうか。」など。一方の②は、「確かに、一方的にユダが話しているから、旦那さまは私達……。おもしろい。「人が人を罰することが出来るか否かという点で、死刑制度などとも関連してくるのではないかと思つた。だが私はやはりイエスを死刑にすることは出来ないと思つた。」など。②の読みの方が、意外、興味深い、という意見が見えられた。

- 13 寺園司「太宰治と聖書」(『国語と国文学』一九六四年十一月)、服部康喜「『駆込み訴へ』と聖書——「人間イエス」の系譜——」(『太宰治研究』19)和泉書院、二〇一一年六月)など。

- 14 引用は『芥川龍之介全集 第十五巻』(岩波書店、一九九七年一月)に拠る。

- 15 のち、『人間キリスト記』(第一書房、一九三八年十一月。その後さらに、木耳社、一九七九年↓柏叢舎、二〇一三年十月)。本稿では、引用は柏叢舎版に拠つた。

- 16 『人間キリスト記』からの影響については、相馬正一「マルキシズム・キリスト教 双極の中の太宰治」(『国文学 解釈と鑑賞』一九六九年五月)、菊田義孝「ユダの心——『駆込み訴へ』と山岸外史著『人間キリスト記』」(『国文学——解釈と教材の研究——』一九六六年五月)、木村小夜「『駆込み訴へ』を読む——山岸外史『人間キリスト記』との接点から」(『季刊「hanika」』二〇一〇年十月)などで論じられている。

17 佐藤泰正は「駆込み訴へ」と「西方の人」イエス像の転移をめぐって」

(『国文学 解釈と鑑賞』一九八三年六月)において、「さて、芥川から太宰へのキリスト像の転移とは何か。芥川の語らんとするものはまぎれもなく(西方の呼び声)を聴いたものの宿命であり、その嘆声であろう。

(略)／太宰にこの東方と西方をめぐる葛藤はない。それは同じキリスト作家でありながら遠藤周作にあつて椎名麟三にないのと同断である。」と述べている。

18 映画パンフレット(シネカノン、二〇〇六年七月)掲載の、弟・猛を演じたオダギリジョーへのインタビュー(取材・文、轟多起夫)では、次のように述べられている。「撮影の途中、西川監督から、太宰治の短編『駆込み訴へ』を参考に渡された。こういったサブテキストを読むのは、オダギリジョーにしては珍しいことだという。「香川さんには先に伝えていたらしいんですけど、僕には言い忘れていたみたいでした(笑)。撮影も後半、裁判シーンを撮りはじめてから、貸してもらって読んでみました。すでに猛の在り方みたいなものがある程度、自分なりに見えていたから読む余裕があつたんでしょね。西川監督がこの本を読んで少なからず影響され、映画の骨子が作られていったことが興味深かったです(略)」。

19 この解説の後に、「本稿は、映画『ゆれる』で早川稔を演じた香川照之氏が独自の視点から書いており、西川美和氏の意向と関係ありません。」と記されている。

20 大野真「鳴動論——映画『ゆれる』の結末が内包するもの——」(『大妻女子大学紀要 文系』二〇一五年三月)。また、大野は、同論文において、「太宰の創造したユダはこの無限運動そのものであり、ゆらぎのエネルギー

ギーそのものであった。(略)太宰が軽やかな語りで「駆込み訴へ」という短編に籠めてみせた、彼自身にとつて最も重く切実なこの問題を、西川美和は映画という別ジャンルで再現し、更にその先へと展開してみせた。これに続く『ディア・ドクター』(二〇〇九年)と『夢売るふたり』(二〇一二年)が、共に優れた作品でありながら、『ゆれる』の衝撃性に遥かに及ばぬことからしても、『ゆれる』は脚本・演出・役者・カメラ、その他すべての条件が見事に咬み合った、奇蹟的な一回性に録取られた作品であつたと言えるだろう。」と、『ゆれる』を高く評価している。

21 『九州大学新聞』(一九五五年四月一〇日、二面)

22 本稿では詳しく触れなかったが、他にも、ユダ／イエスの一つの変形として、Lady Gaga "Judas" (二〇一一年)を講義で取り上げた。この詞では、「私」は、香油事件のマリアとして、イエスが現在の恋人、ユダが過去の恋人として配置され、ミュージックビデオでも同様に演じられている。

【その他の参考文献】

- ・三好行雄編『太宰治必携』(學燈社、一九八一年三月)
- ・東郷克美編『太宰治事典』(學燈社、一九九五年五月)
- ・山内祥史編『太宰治著述総覧』(東京堂出版、一九九七年九月)
- ・『太宰治全集13』(筑摩書房、一九九九年五月)
- ・『文豪ナビ太宰治』(新潮文庫、二〇〇四年十一月)
- ・『太宰治大事典』(勉誠出版、二〇〇五年一月)

(北九州市文化財保護審議会委員)